

令和五年度 西郷隆盛を偲ぶ書道展課題

〈和歌の課題〉

みだれたる 糸のすぢすぢ 繰返し いつしか解くる 御世となりけり

沖永良部島牢中の作と伝えられる。
(口語大意)

乱れた糸をくり返しくり返しほどこいてゆくうち、いつのまにか、もと通りになった。そのようにこの世の中もありたい。

〈漢詩の課題〉

五言律詩

酷暑有感

酷暑こくしょ感かん有あり

苛雲蒸洛地

苛かう雲ん蒸らく地ちに蒸むし

酷吏益威加

酷こく吏り益ます威ます加くわ

夕殿憂蚊蚋

夕せき殿でん憂う蚊せ蚋いを憂うれえ

炎郊苦蝮蛇

炎えん郊こう苦ふく蝮だ蛇くに苦くるしむ

鋭刀頻按櫺

鋭えい刀とう頻しき按は櫺あんを按あじ

壯士直忘家

壯そう士し直ただ忘わす家を

天定人離日

天てん定さだ人ひ離はなるる日ひ

西風忽掃邪

西せい風ふう忽たち掃ま邪はらを掃はらわむ

(口語訳) 朝、主君に優遇されても夕方には焚書坑儒かんしょくとうぶというように処罰される人の世の浮き沈みは、まるで空の晴れたり曇ったりするのに似て定まらないものである。たとい日がささなくても向日葵ひまわりは太陽に向くように、もし運命が開けなくても、自分は天朝に対して勤皇の真心を押し通したい。京都の親しい志士たちは皆死んでしまい、南の小島にとられ人の自分がひとりぬくくと生き残っている。生死が天命によることは疑いないが、どうか死んでも魂はこの世にとどまっ

て宮城をお守りしたいものである。 ○焚坑はんき 焚書坑儒のこと。秦の始皇帝の時行なわれた思想弾圧。 ○洛陽らくやう 中国諸王朝の首都。

ここは京都のこと。 ○鬼おに 死

者の魂。 ○南嶼なんいつ 南の小島。

ここは沖永良部島。 西郷は文

久二年(一八六二)から一年

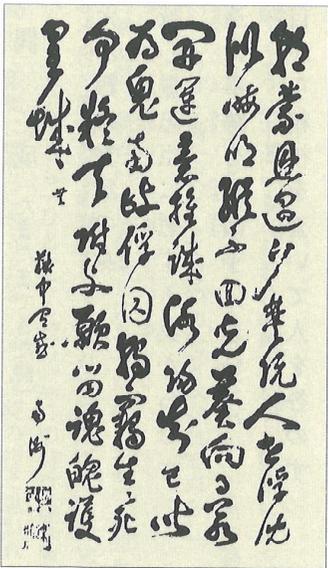
半ここに流され、「囲い入り」

の囚人となった。

〔下の書幅は、三行上に「無」

を書き落としたので、末尾に

小さく補筆している。〕



(画)(青)(全)(庄)(薩)(隆)

七言律詩

獄中有感

獄中感有り

朝蒙恩遇夕焚阬
人世浮沈似晦明
縱不回光葵向日
若無開運意推誠
洛陽知己皆爲鬼
南嶼俘囚獨竊生
生死何疑天附與
願留魂魄護皇城

朝に恩遇を蒙り夕に焚阬せらる
人世の浮沈は晦明に似たり
縦い光を回らさずとも葵は日に向かう
もし運を開く無くとも意は誠を推さむ
洛陽の知己皆鬼と為り
南嶼の俘囚独り生を窃む
生死何ぞ疑わむ天の附与なるを
願わくは魂魄を留めて皇城を護らむ

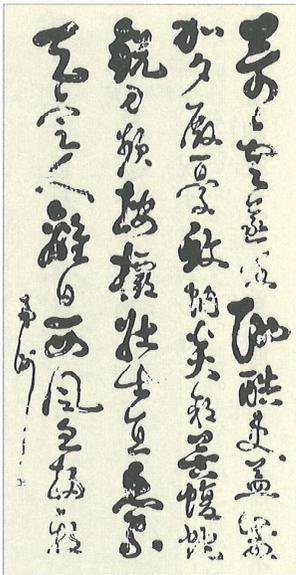
〔口語訳〕暑さきびしい夏の雲が京都に湧き起こって、酷暑の猛威がますます加わってきた。夕方、宮中の御殿は蚊やぶとに悩まされ、焼けつく郊外ではまむしの害に苦しむといった、ごたごたつづきの危ない世の中、つわもの達は鋭い太刀の柄に手をかけ、決死の覚悟ですぐ家のことを忘れて血気にはやる。やがて世の中が変わり、人心が今の政権（幕府）から離れる日、西風がすぐ世の邪悪を払い除くように、薩長の軍が幕府をくつがえすであろう。

〔慶応三年（一八六七）夏、三十九歳の時の作。〕

○洛地Ⅱ京都のこと。○酷吏Ⅱ本来無慈悲できびしい官吏のことだが、ここは酷暑のたとえ。

★西郷の作詩したものは、本書では一九七篇である。その

中の八割一五六篇が七言絶句である。その他は、五言絶句が十三篇、五言律詩が十三篇、七言律詩が十四篇、古詩が一篇である。



（館）

七言絶句

示子弟

子弟に示す

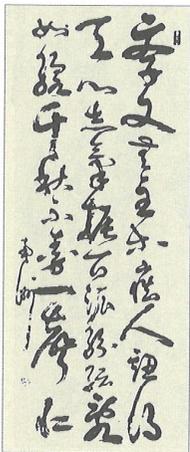
學文無主等癡人
認得天心志氣振
百派紛紜亂如線
千秋不動一聲の仁

文を學んで主無くんば痴人に等しく
天心を認得すれば志氣振う
百派紛紜乱れて線のごとくなるも
千秋動かず一声の仁

〔口語訳〕いくら古典を学んでも主体性、目的意識がなくては馬鹿者同然で、天地自然の理法を

はつきり認め得たら、勉学の意気ごみが一層高まる。種々雑多の学派学説が入り乱れて、糸がもつれたような状態で何が何だか分からない現状だが、千年不動の真理は唯「仁」の一語である。

○志氣Ⅱ意気ごみ。○千秋Ⅱ永遠の意。



（館）